

大正区のおゆみと沖縄

46期生

I テーマ設定の理由

私の住む大正区には沖縄出身者がたくさんいる。それに沖縄会館という建物や沖縄の人のための運動会まである。私は何故この大正区にそんなに沖縄に関するものがあるのか昔から疑問に思っていたので今回調べてみることにしました。

II 研究方法

- (1) 文献調査 大正区の歴史や人口推移、沖縄の文化などを調べる。
- (2) 現地調査 大正区に住んでいる沖縄出身者の方に話を聞く。
沖縄会館に行って責任者の方に話を聞く。
大正区を歩いて、沖縄に関係ありそうなものを探す。

III 研究内容

1 大正区の歴史との関係

(1) 大正区の歴史

大阪市の南西に位置する大正区は昭和7年10月港区から分区しました。平成4年現在、区制をとって60年になります。面積は、南北約4.74km東西約2.94kmに及びます。

さてこの大正区は木津川と尻無川が運び出す土砂が沈み、長い年月の間に河口に州がつけられ、やがて新田開発が行われて州が耕地になり、村落ができ農・漁業による人々の生活が営まれていました。

明治に入ると、我国最初の近代紡績工場といわれる大阪紡績会社が建設され、さらに海・河岸沿いに工場が建設されました。

大正5年3月、築港と木津川を結ぶ木津川運河が完成すると、これに沿ってセメント、製鉄、造船、化学肥料などの大工場が進出しました。

木津川、尻無川沿いには第一次世界大戦の造船ブームによる大小造船所が林立して市内有数の工業地に躍進しました。



▲図1 大正区の地図

大正12年6月完成した大正運河を中心に市内の西長堀や境川から移転した木材業者によって木材街が形成されました。最盛期の昭和7、8年頃には業者数はおおよそ500~600軒といわれています。

(2) 人口の推移

大正区の人口の推移をみてみたいと思います。すると、昭和7~15年は着実に人数が増えているのが分かります。昭和7年以前は、まだ分区していないため分かりませんが、おそらく増勢をたどっていったものと思われる。

私は、もしかしてこのころ沖縄の人がきたのではないかと思い、沖縄出身者居住地状況を調べてみました。

表2を見たら分かるように、1920年は主に九州に移っているが、1925年以降は圧倒的に大阪に移住しています。やはりこのころに沖縄の人が大阪にきていたのです。(昭和7年-1932年)

またこのころ、大正区では木材街の最盛期だから、大阪に来たほとんどの人がこの大正区に来たと思われる。

▼表1 大正区の人口の推移

年代	世帯	人口(人)
昭和7	25,200	110,500
10	28,169	131,037
15	30,183	137,931
20	8,542	27,637
戦後22	11,923	43,175
25	15,176	59,784
30	18,006	78,012
35	22,985	93,377
40	25,528	95,509
45	25,343	88,954
50	27,077	88,488
55	27,933	84,041

大阪にきた人
全国に移住した沖縄の人

で割合を求めてみたところ、1920年(大正9年)は10.9%、1925年(大正14年)は42.8%、1930年(昭和5年)は41.9%、1935年(昭和10年)では48.4%、1940年(昭和15年)になると47.9%という結果になり、全部の年を総括して計算してみると44.3%となりました。

実に全国の2/5以上がこの大阪に集中しているのです。

ちなみに1920年、九州だけでは42.1%を占めています。

▼表2 沖縄出身者居住地状況(上:男 中:女 下:合計)

	1920年	1925年	1930年	1935年	1940年
大阪	537 514 1,051	4,709 3,824 8,533	9,752 8,340 18,092	15,648	20,769 21,483 42,252
兵庫	284 240 524	274 187 461	1,108 1,156 2,264	1,281	5,966 5,460 11,426
和歌山	15 5 20	217 609 826	724 1,319 2,043	1,845	710 2,440 3,150
東京	848 414 1,262	722 324 1,046	2,842 1,472 4,314	3,884	3,740 2,998 6,738
神奈川	127 23 150	1,013 1,832 2,845	1,808 1,690 3,498	2,255	3,748 2,379 6,127
福岡	1,623 181 1,804	833 207 1,040	1,705 610 2,360	不	2,884 1,487 4,371
鹿児島	1,203 1,049	167 117	1,664 1,440	明	1,376 1,302

	2,552	284	3,104		2,678
全国	6,357	9,097	23,431		44,443
	3,269	10,829	19,719		43,876
	9,626	19,926	43,150	32,335	88,319

2 沖縄との関係

(1) 沖縄の文化

沖縄にはシーサーという置き物があります。これは家を守るためのものですが、では家のつくりなどはどうなっているのでしょうか?

こんなところでも共通点があるかも知れないと思い、沖縄の文化を調べてみることにしました。

一家

沖縄の古い村には、家のまわりをフクギの屋敷木や石垣でかこったところがよくみられます。竹富島では今でも美しい石垣の屋敷が残っています。これは台風から守るためですが、病気やいろいろの災いを及ぼすものの侵入をよけるためにシーサーを置いています。瓦は赤瓦ですが最近では減っています。

一食

肉は主に豚肉を食べます。沖縄の人は豚の内臓や骨まで食べるので当然市場でも売っています。

野菜だって勿論あります。特に夏の代表的な野菜といえば、ニガウリ・ヘチマ。ニガウリとはウリとキュウリを足して2でわったような形をしていて、イボイボがあります。味は名のとおり苦いです。

私はこれらのものと大正区との関係を探るために、大正区を調べてみました。

(2) 沖縄文化との類似点

まず、沖縄との関係が一番ありそうな沖縄会館へ行ってみました。しかし何も催し物はなかったので、沖縄民芸店を少し見て沖縄会館を出ました。

それから沖縄出身者が一番多いと思われる平尾へ行ってみました。何か沖縄らしいものはないかとまわっていたら、すごい建物を発見してしまいました。それはもう一つの沖縄会館です。(写真1) 私はこんなところにもう一つの沖縄会館があるとは知らなかったもので、とてもおどろきました。



▲写真1

何故こんなところに沖縄会館が建っているのか、オーナーの方に質問してみました。

Q1：どうしてここに沖縄会館が建っているのですか。

A：沖縄県人会の寄付で、この辺りの沖縄出身の人が建てました。

Q2：この辺りは沖縄出身の人が多いのですか。

A：半分くらいはいるとみていいと思います。

ということでした。

では、どうしてこんなに平尾に沖縄出身者が多いのか。

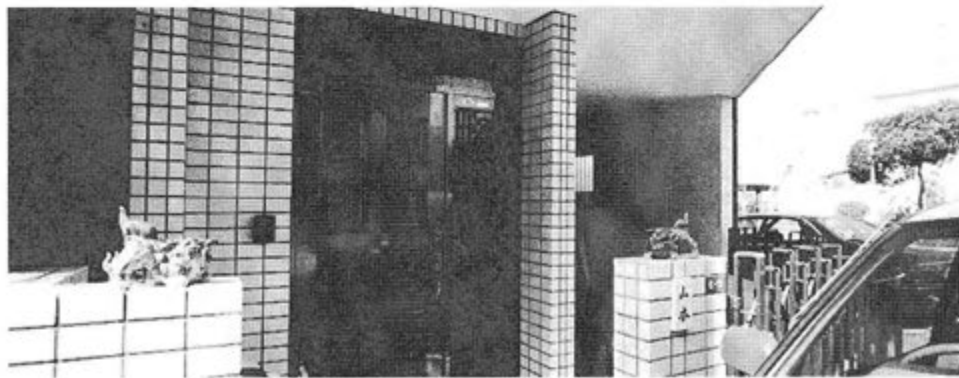
沖縄を出てきた人々はまず北恩加島やその一帯に多く住みつきました。しかし、大正内港化計画による盛土工事で北恩加島地区の住民を代替地として平尾に住まわせました。そこに沢山の沖縄出身者が含まれていたのです。

平尾は本当に沖縄に近い地区です。インスタントカメラを買いに行っても、店には立派なシーサーが飾ってあるし、お店を見ても沖縄そばの店が3軒もありました。

次の写真は、異なる2つの種類のシーサーをとってみました。まず写真2は、本物のシーサーに似ています。しかし、これを飾っている家は少ないです。(実際は屋根に飾る)写真3は玄関に飾るために作られたもので、こっちの方が大正区では一般的です。



▲写真2



▲写真3

行事としては沖縄県人会主催の運動会、沖縄会館での琉球舞踊や蛇味線(蛇の皮で出来ている)などです。

こうしてまわってみると、まだまだいっぱい沖縄があるなあと感じました。

3 沖縄の人たちは

(1) 沖縄を出て

沖縄の人は何故この地を出たのか。そのわけを調べてみました。

沖縄の人の出かせぎが本格化するのは第一次世界大戦ごろからです。大戦に伴う一時的な好景気で黒糖の輸出が増え、沖縄経済は一時的に良くなったが“大阪へ行けば儲かる”と多くの若者をせきたてました。しかし、技術を持たない彼らには単純労働しかありませんでした。

大戦後の世界的な景気後退は沖縄経済に打撃を与え、パナマ帽の輸出禁止とそれに伴う失業、糖価の大暴落をもたらし、ソテツ地獄(第一次世界大戦後の戦後恐慌期の慢性的不況下における沖縄経済及び県民生活の窮迫状況を意味する用語。野性のソテツの実や幹を食べて飢えをしのいだ)と呼ばれる現象や糸満売り(糸満漁夫のもとで十歳前後から前借金と引換えに年季奉公すること)が行われました。

また、この頃、米国の移民政策の硬直化で移住が困難になったことから、本土への移住が急増しました。

(2) 何故この地を選んだのか

沖縄から本土へのお出かせぎとして出るようになったのは、明治30年代からです。そして戦前までに延べ15万人を超える沖縄県民が本土へ渡りました。

当時、これらの多くの人々を本土へ運んだのは船舶です。1884年(明治17年)、大阪商船は大阪・沖縄線を不定期で就航。1885年(明治18年)には定期就航として月1回神戸・鹿児島・大島に帰港しました。翌年には月に一航海半、1891年(明治29年)になると、大阪商船以外に沖縄広運・沖縄親睦会・日本郵船が沖縄船に就航、1989年(明治31年)には月4回となり、1903年には大阪商船だけで526回にもなりました。そして明治末には10航路にも達しています。

また、この頃大正区は、埋め立てによる開発がなされていたため、土木関係の仕事が多くありました。1915年には大正橋が完成、鶴町と北恩加島の間には市電が走るようになり、さらに1919年には最初の市営住宅や託児所がつけられました。

実際に沖縄から出てきた御夫婦(77才、71才)に話を聞いてみました。

Q1：いつ、何才のとき大正区に出て来られましたか。

A：夫 昭和11年で21才のとき、妻 昭和15年4月で19才のとき

Q2：なぜ沖縄をはなれたのですか。

A：都会への憧れや働くには都会がいいと思ったからです。

Q3：交通機関は何でしたか。

A：船でした。船賃は10円50銭~11円でした。ちなみに日給は男子は1円5銭、女子が35銭でした。

その他いろいろな質問をしました。

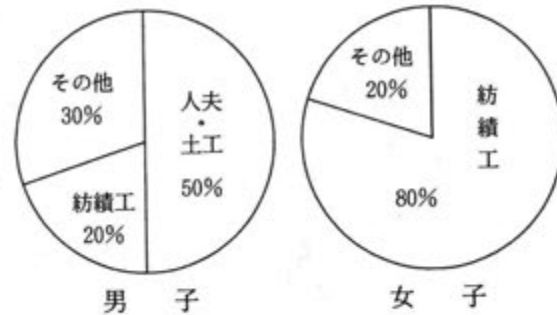
(3) 沖縄出身者がついた職

沖縄県民が大阪に来てついた職は右の表のとおりです。

やはりこの頃発展した製材所にかんりの人数がついています。

しかし、人夫・土工の仕事はかなり辛かったようだし、女子は日給もかなり低かったようです。

▼表3



IV 結論

沖縄出身の人が大正区に住んでいる。これは私達にとって、別に変ったことでもなかったし、それが普通でした。大正区は一番沖縄に近い区でした。しかしその後ろには戦争や景気後退、大正区の飛躍的な発展などのいろいろな要素が組み合わさって今の大正区を作りあげたということがありました。

そんな大正区の中で住む私が沖縄との関係を知れたことは、とてもいい経験だったと思います。

歴史は、どんなささいなことでも、いろいろな要素が組み合わさって出来ているのだと思いました。

V 総括

沖縄の人達がなぜこの地を選んだのか、それには戦後の景気後退、それに伴う失業、それから定期船航路、そのころの大正区の発展など全てのことがありました。

この一つでも欠けてしまえば、きっと沖縄に一番近い大正区は出来あがっていなかったと思います。

それに、私のこの研究が成り立ったのも、同じ疑問を持って前に調べて下さっていた人がいたからで、私はその人と同じことを研究材料にしたのだな、偶然だなと思いました。最後に、保田沙希さん、西平さん、比嘉さん御夫婦、御協力ありがとうございました。

・参考文献

- ・西口 忠 「大阪と沖縄—その歴史とつながり」 (大阪春秋社『特集港区・大正区』)
- ・上江洲均 『沖縄のくらしと文化』 ポプラ社
- ・大阪都市教会 (編) 『大正区史』